

足枷

僕は障害者だ。

とはいえ見た瞬間僕を障害者だと判断できる人は少ないはずだ。五体満足で人によっては健常者と全く同じように感じると思う。

ただ一つだけ、僕には普通が欠けていた。

物心がついたときから普通とは違う行動を取ることは多かった。授業中教室を出歩いてみたり、保護者宛の書類を鞆の肥やしにしたり、学校の備品を好奇心で壊してみたり、簡単なことではあるけど致命的に評価を下げることをばかりしてしまう。

だから僕は何度も何度も親や教員に怒られた。親や教員はそのことに疲れ切っていたし、僕自身もつかれていた。

でもそれはわざとというわけでも、ふざけているわけではなかった。普通の人が感覚的に理解している部分を理解できないのだ。でも見た目も、環境も、頭の中も、余りに周りと同化していて、その特異さを「正確に」理解してくれる人はいなかった。僕は出来損ないというレッテルを張られた。

母親に手を引かれ、病院に連れて行かれたのは小学校 3 年のころだった。そこで僕はいくつかの知力テストと問診を受けた。

「ADHD です」

真っ白な診察室で医師が告げたのは発達障害の名前だった。

隣の椅子に座った母親が安心した表情になった。

ADHD は知的障害を伴わない発達障害の一つで、生涯治ることのない病気だ。そしてその原因は詳しく解明されていない。

症状には、落ち着きの欠如や注意力の散漫、衝動的な行動というものがあげられる。具体的には時間管理ができなかったり、思い付きで動いたり、忘れ物が多かったりする。どれも、自分によく当てはまることだった。

それからというもの、僕は何かにつけて障害を持ち出すようになった。

勉強ができないのは障害のせいで集中力がないから、時間の管理ができないのは障害のせいで衝動的に動いてしまうから、という具合に。

今まで自分の不出来だと思っていたその原因が自分の意志とは駆け離れたところにあると知って安心した。そして、自分は障害による被害者で何度となく周囲から不当に裁きを受けてきた、と考えると怒りが沸いて来るのだった。

僕は誰にも理解されない安心感と怒りを抱えて、孤独に生きた。普通とは違う人間なのだから、普通の人間とは一緒にならない。親しくならない。それで一種の平穏が保たれていた。

だが高校に上がると、環境が変わった。

高校の方針で部活に入ることが強制されていたのだ。

中学まではそんなことを強制されることなく帰宅部として過ごしていたのだが、ついに年貢の納め時が来た。

入る部活は天体や物理学に関する番組を食い入るように見るぐらいには科学に興味があったので、科学部にした。部員が一学年上の先輩二人と同期が一人だけと比較的小規模な集団で、人付き合いが面倒くさくなくさそうというのも選んだ理由の一つだ。ただ、その点に関しては大きな誤解があった。人数が少なれば人付き合いが楽かといえばそうではないのだ。

科学部で活動する中、僕の障碍は健在だった。フィールドワークの集合時間に遅れたり、集団行動ができなかったりと、それは形を変え僕を苦しめる。

自分の体の中に本当の自分と障碍が一緒にいて普段は本当の自分が生きたいように生きているのに、時々障碍がその足を強く引っ張る。そんな妄想を繰り返してはもし自分の中から障碍を追い出せたらと考える。もし本当にそうならば僕は普通の人のように時間を守り、集団行動をちゃんとし、つつましく生きることができたのかもしれない。

中学時代、いじめがあった。

思春期に突入した子ども達は、その急激な環境の変化にストレスを感じる。小学生という集団が一時的に解散され新しいコミュニティーを形成しなくてはならないというストレスや心身の変化に対するストレス、そして初めての受験に対するストレス。

彼らには、はけ口が必要だった。そしてそのはけ口となったのが僕だった。普通とは違う僕はいじめの対象として選びやすかったのだと思う。

ある日の朝、僕は机から教科書が消えていることに気付いた。物忘れが激しく置き勉を常としていた僕にとって、学校に教科書がないということはつまり誰かの手によって教材が移動させられたということを意味していた。よく探すと自分の教室がある階のトイレのごみ箱から見つかった。

教室に戻ると、どこからか笑い声が聞こえた。

犯人はすぐに見当がついた。クラスのお調子者のグループ、その中の誰かに違いない。彼らには教科書が捨てられるよりも前から陰で笑われているような感じで、事あるごとに僕の物まねをして楽しんでいたのだ。

僕はすぐにそのことを先生に言った。

先生は、よく言って聞かせるよ、と答えた。

でも結局、学年が上がってクラス替えになるまでいじめは続いた。

みんな大嫌いだ、と思った。いじめてくる人たちや何もしてくれない先生だけではない。いじめがあったことを知っていたクラスメイトだってそうだ。誰も味方になってくれなかった。そこになんだか、人間の本性を見た気がした。

今でも人間を嫌悪することがある。状況に応じて態度をコロコロ変える不規則性や、自分と違うものは人格を踏みいじってでも修正しにかかる傲慢さ、他人の不幸を喜ぶ狂気。鋳型に入れたような悪人がいないのと同じように、完璧な善人なんていない。だれでも、どこかに汚い部分があるのだ。

「なあ、一緒に帰ろうや」

部活終わり、同期の藤岡くんはそう切り出した。

部活に入って一か月程、彼とは世間話をする程度の仲になっていた。でも、一緒に帰るほどの仲かと言われたら少し疑問だ。

「いい、けど」

僕は控えめに答える。

藤岡くんは人懐っこい性格をしている。相手の懐に飛び込むのが上手で、会話は面白く、すぐに友人を作ってしまう。一方でわがままなところもある。勝手に話を進めては、自分のいいように僕を使っていく。その姿がなんとなく中学時代のお調子者と重なる。

帰り道、僕らは並んで帰った。僕は学校近くのバス停まで歩いてバスに乗るが、藤岡くんはそのまま徒歩で自宅に向かうのだという。

「じゃあね」

藤岡くんが言う。

バス停で別れて、彼の背中が見えなくなったあたりで僕は一気に疲れを感じた。

僕の話はなんとも思わないでほしいから。

人付き合いは嫌いだ。僕が自由に生きようとしても、他人はどこからともなく現れて、正義の名のもとに好き勝手評価してくる。「こういうやつ」という消えないレッテルを張り付けて、それ相応の対応を仕掛けてくる。SNSの炎上はそのいい例だ。ろくにその人を知らないのに偏見で「潰してもいい」と判断して、徹底的につぶす。それが怖くてたまらない。

いじめという形にならなくても、世の中とはつまりそういうところなのだ。

「夏休みに一日使ってフィールドワークします」

7月の終わり。期末試験明けの部活動で顧問の西森先生はいった。

合宿の内容は地元の山にあるペンションに行き、そこを拠点としてフィールドワー

クをする。食事は用意されていないので食料を持ち寄り、キャンプでカレーを作って食べるとのことだった。

僕は先生に伝えられた日程を手帳にしっかり記述した。

その日の朝は少し早めに起きることができた。時刻は午前 5 時 34 分。

今日の予定としては 9 時に学校に集合し先生の車に乗って地元の山に向かうことになっている。学校へはバスを乗り継いで 30 分ほどなので後はたっぷり 3 時間弱あるのだ。支度の時間を 1 時間と見積もっても時間が余る。今日は一日仕事だ。山の中を駆け回ることを考えるともう少し寝ておいた方がいいかもしれない。僕はブランケットにくるまり今日のフィールドワークに思いを馳せた。

次に目を覚ました時、時計は 9 時 26 分を示していた。

僕は血の気が引いていくのを感じた。

まずいと思ってスマートフォンを取り出すと不在着信が何件も入っている。部長の南条先輩からだ。

僕は大きなため息を漏らした。

——これだから障碍は。

胸が重たくなった。しかし、うじうじしていても仕方ないので南条先輩に電話をかける。長い時間ベルが鳴り続けて、7 コール目でようやく電話がつながった。

「すみません。今日はお休みします」

開口一番にそういうが、向こうからの返事はない。

「あの、南条先輩？」

するとようやく、低い、唸るような声が聞こえてきた。

「あのさ、集合時間何時か知ってる？」

「すみません」

電話の奥で舌打ちが聞こえた。

気を抜いた途端これだ。こうして不信感を買って、なにやってるんだろうか？結局僕は障碍が足枷になって、冷たい視線を浴びるのだ。もし、自分の障碍を切り離すことができるのならどんなによかったらうか。

「もういい。今日は休むのな」

「はい。今日は本当にすみま——」

僕が話し終わる前に、電話は切れた。

夏休み明け初めての部活に行くと雰囲気が変わっていた。

「藤岡、使ったシャワー洗っといて」

「藤岡、ホウ酸取って」

「藤岡、帰りにゲーセン行こうぜ」

南条先輩はことあるごとに藤岡くんの名前を呼んだ。それは藤岡くんをひいきしているようで、実は僕に対する当てつけなのだと思う。

雰囲気というだけだから、言い切ることはできないが南条先輩が僕を避けているような気がした。

過去にあったいじめと、今回のことを重ねる。決して同質のものではない。南条先輩には僕を罰していい理由がある。でも、発端は同じだ。自分の中にある障害が足を引っ張る。もう、人付き合いはこりごりだった。

僕は部活を休むようになった。

帰り支度を済ませると階段の方まで向かって足を止める。そのまま上がれば科学部の部室があって、下れば昇降口がある。少し考えた後、僕は階段を下った。

昇降口を出ると、見覚えのある人影がそこにあった。

「よっ。一緒に帰ろうぜ」

藤岡くんは歯を見せて笑った。

「何か悩んでるなら話してみ」

本当は何も話したくない気分だった。でも藤岡くんはしつこく、結局僕が折れた。僕は南条先輩に嫌われて部に居場所がないという話をした。そしてそれは障害のせいだということも。障害のことを誰かに話すのは初めてだった。普通とは違うことをより一層印象付けてしまうようで怖かったのだ。

僕が話している間、藤岡くんは一言も口を挟まなかった。そして僕が話し終わると、慎重に口を開いた。

「そうか。それは大変だったな」

初めての言葉だった。やさしい言葉をかけてもらったことなんてなかったから、不思議な気分になる。

「なんか、おばあちゃんを思い出したんだ。うちのばあちゃん認知症でさ、色んなこと忘れちゃうんだよ。なんでそうなるんだよって思うんだけど、本当に仕方ないんだよな」

自然と涙がこぼれた。自分でもなんで泣いているのかわからない。何を認めてもらったわけでもないのに、何かを認められた気になった。

「なんで泣いてるんだよ？」

「分からない」

そう言って僕は笑った。

「先輩にも話してみればいいよ」と藤岡くんは言う。「話したらきっと先輩だってわ

かってくれるだろうしね」

そうして僕らはバス停までの距離を一緒に歩いた。

藤岡くんもきっと、完璧な善人じゃない。どこかに汚い部分を持っていて、いざという時にはあのいじめっ子のような悪人になる。どこまでも信頼できる人間なんていないのだ。でもそれでいいと思った。一瞬でも、善人でいてくれたなら今はそれでいい。

藤岡くんと帰った次の日の放課後、僕は階段の前で立ち止まっていた。上がれば科学部の部室があって、下れば昇降口だ。そして少し考えた後、僕は階段を上がった。

作成年月日：2019年9月24日